



2015年7月15日発行（季刊）

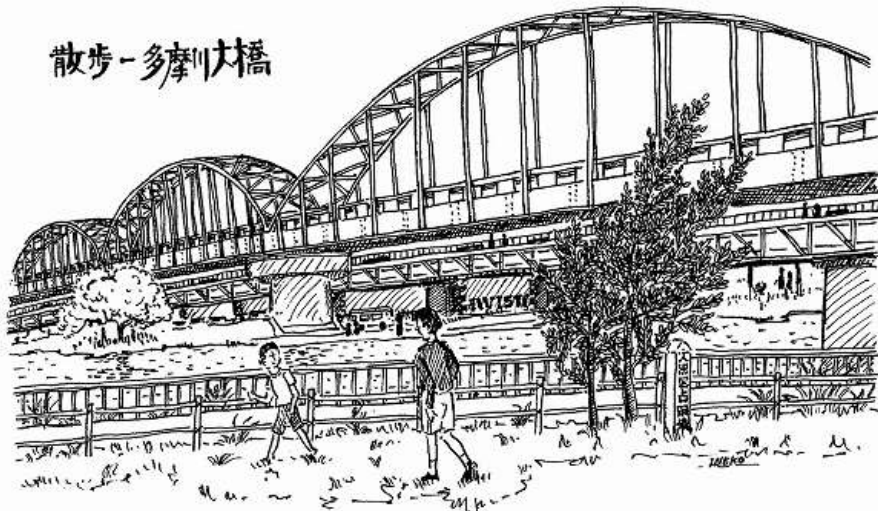


# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2015年7月  
第103号

漢 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久

## 散歩 - 多摩川大橋



## 目 次

漢点字の散歩（40）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（96）（山内 薫）	7
東京漢点字 例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	11
東京漢点字 学習会報告（菅野良之）	17
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	23

## 漢点字の散歩（四十）

岡田 健嗣

### まされる宝



前回は、漢点字を習得してからの、私の読書の変化について述べてみました。

どう変わったかということをもとめてみますと、漢点字を習得して読書することに慣れるに従って、カナ点字を触読する読書、とりわけ漢字の知識を得られぬままにカナ点字を触読する読書は、音を表すカナ文字の点字符号を追うという行為に終始するものであることに、まず気づかされました。終始するというのは、それから先には進めないということですね。その次に気づかされたのは、漢点字による読書は、カナ点字による読書では得られなかったものを、私にもたらしにくれたことでした。それは、読書とは、決して書かれている文字から音を受け取るだけのものではなく、またそこから一方的に情報を享受するものではなく、むしろ文字あるいは文に、

それを読む側から問いかけ、また受け取り、それを繰り返しつつ理解を深めよう、あるいはその幅を広げようとするものだということが、それは極めて能動的な行為であるということでした。私はこのような行為を、「読書のフィードバック」と呼ぶことにしました。

前号では、現在本会で漢点字訳に取り組んでおります伊藤博著『萬葉集釋注』（集英社文庫）の第三巻・巻第五に収められております、山上憶良の「嘉摩三部作」と呼ばれる一連の作品群の第二、八〇二・八〇三番の題詞と、「釈文」からそれに該当する伊藤先生による解説と、その文をカナ点字に做った書式によるひらがなに置き換えた文を並べて、皆様にお読みいただきました。このように刊行され流布されている文章を、ひらがなだけでお読みいただくという試みは、ほとんど為されることはありません。短歌や俳句そして現代詩では、ひらがなだけ、あるいはカタカナだけで表記された作品が時折発表されますが、それはむしろ、ひらがなだけ、あるいはカタカナだけで表すという、言わば日本語文の標

準的な表記法である漢字仮名交じりではない表記法で、何とか異化しようという試みに他なりません。表現として新たなものを見出そうという試みには違いありませんが、残念ながら（と申しておきましよう）、漢字仮名交じりに代えてカナ文字分かち書きを、日本語の標準の表記法にしようという動きには、結びつくことはありませんでした。それらの作品の中には優れたものも少なくないはずですが、たとい優れた作品であつても、個別の作品として優れたものであつて、その作者もひらがなだけ、あるいはカタカナだけで表現することを指向しているわけではありません。作者の多くは、その作品にのみ、そのような表記法を表現として選択しておられるのです。このように日本語の表記としてカナ文字分かち書きを一般化しようという試みは、現在まで行われておりませんし、実現することはありませんでした。漢点字を習得して読むようになって、初めて私にその理由が分かったのです。それがカナ点字だけの文を触読する読書では、「読書のフィードバック」を経験することができないということでした。

前号ではその「読書のフィードバック」が、どのような条件下に行われるか、読者の皆様に体験していただきたいと考えて、伊藤先生の文を、ひらがな分かち書きの文に替えて、引用させていただきました。そして幾つかの感想を頂戴しました。大方は「ひらがなだけの文章は、とても読めない」というものでした。この試みにご参加下さいました皆様には、深く感謝申し上げます。またこの試みは、「原文が損なわれた」というお叱りを招くものであったかもしれない。伏してお詫び申し上げます。

今回は前号とは別の角度から、この憶良の作品と伊藤先生の解説を取り上げてみたいと思います。まずは前号で紹介しました伊藤先生の解説を、再録してみたいと思います。

.....

嘉摩三部作の第二群。子に対する愛情をうたった作として、すこぶる著名。しかし、仏教では、一つのもの、とくに我が子などに執着することは煩惱の代表的なもので、道にもとるとされた。仏教に明る

かつた憶良はそのことをよく知っていて、右の作において、「子等を思ふ」ことが愛欲の煩惱であることを充分知りながら、しかも、現世の一個の人間としては子への愛着に執（とら）われざるをえない悩みをうたっている。一群は、単純な親の愛情を述べたものではなく、子を愛することの苦悩を主題にしているのである。

その序文は、意を通すと次のようになる。

釈尊が御口ずから説かれるには、「等しく衆生を思ふことは、我が子羅睺羅を思ふのと同じだ」と。

しかしまた、もう一方で説かれるには、「愛執は子に勝るものはない」と。

この上ない大聖人でさえも、なおかつ、このように子への愛着に執られる心をお持ちである。ましてや、俗世の凡人たるもの、誰が子を愛さないでいられようか。

至極の大聖さえ、教理は教理として、子への愛に執られる心をお持ちであった。ましてや、自分のような凡愚が子に執られるのはやむをえない。という

次第で、憶良は、子への愛の歌八〇二〜三をうたう申しわけをここで述べている。一種の弁解であり、それだけに、我が子への愛着をうたうことに対して、憶良が苦悶を抱いていたことが知られる。

しかも大切なことは、「等しく衆生を思ふこと羅睺羅のごとし」という、慈愛の精神を説く言葉は、むろん仏典の至るところに見えるけれども、「愛は子に過ぎたることなし」という発言は、仏典に、釈迦の言葉としては見られないといわれていることである。憶良が仏典を誤解したのか、それとも、憶良があえて推量して、釈迦といえども内心に子への煩惱があつたはずだと考えたのか。いずれかはつきりしない。

いずれにしても、憶良が歌詠の拠り所とした「愛は子に過ぎたることなし」という言葉は、憶良が勝手に作り出したものと考えられる。そういう作りごとまでして依り付く柱を求めるほど、憶良は、我が子に執られることの罪を意識していたわけである。

.....

以上が「嘉摩三部作」の第二番目の題詞の、伊藤先生の解説です。

「嘉摩三部作」という歌群は、大伴旅人の妻・郎女が夫の任地である太宰府で身罷つて、営まれた追善供養に、憶良は「嘉摩」の地に査察に向かなかければならなかったことから、欠席を余儀なくされました。仕事とはいえ、上司であり歌の友でもある旅人の妻の追善に列席できなかった憶良は、挽歌を作つて送っています。そして出張先の嘉摩の地で、万葉集に八〇〇〇八〇五番として収められている、三つの歌群を作っています。これが「嘉摩三部作」と呼ばれる歌々です。

「嘉摩三部作」の第一番目は、孝を忘れて遊び惚ける男を例に上げて、確かに自由を満喫したい気持ちには分かる。だが親も子もあるだろう。愛しい妻もいるだろう、と歌います。憶良は情を寄せながらも、心得違いをしてはいまいか、と論じます。

その第三番目では、人生は短い、若さを謳歌するのはよい、だが何時の間にか時は過ぎる、杖に縋つてやつと立ち、歩くのものもものを言うのもままならな

い。気づけば人に嫌われ厭がられ、邪慳にあしらわれて茫然自失、思い知るのは老いの悲しさ、人生の空しさ。

さて第二番目の歌は、長歌と反歌、そして伊藤先生の歌の訳を掲げてみます。

八〇二

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ  
いづくより 来りしものぞ まなかひに もとなかかりて 安寐し寝さぬ

(うりはめば こどもおもほゆ くりはめば ましてしぬはゆ いづくより きたりしものぞ まなかひに もとなかかりて やすいしなさぬ)

反歌

八〇三

銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子に及  
かめやも

(しろかねも くがねもたまも なにせむに まされるたから こにしかめやも)

.....

瓜を食べると子どもが思われる。栗を食べるとそれにも増して俵（しの）ばれる。こんなにかわいい子どもというものは、いったい、どういう宿縁でどこから我が子として生まれて来たものなのであるか。そのそいつが、やたらに眼前にちらついて安眠をさせてくれない。（八〇二）

銀も金も玉も、どうして、何よりもすぐれた宝である子に及ぼうか。及びはしないのだ。（八〇三）

伊藤先生の解説、長歌は、

宿縁として生まれて来たもの、そいつがやたらとちらついて安眠をさせようとしな。宿縁である以上、この執着もまた宿縁であって、人間の力では処理しきれない。憶良は、この長歌で、そういう俗世の切なさを示しているのだと思われる。いわば、かわいくつてならない悩みである。子はかわいくてよいものだという単一な心情を述べているわけではない。

……  
仏教がわが国に入ってきたのは、恐らく五・六世紀ころと言われます。そして憶良の生きた八世紀は、その仏教で国を建てようとする時代でした。次の巻六は、東大寺の大仏（盧舎那仏、遍く地上を照らす仏）を安置した聖武天皇を巡る宮廷歌人たちの歌で構成編まれています。煌びやかな歌が満載されていますが、不穏な気が押し寄せている時代でもあったようです。

この仏教の思想の眼目は、衆生の執着を去るところにあると言います。執着、つまりあらゆるものの欲望、その欲望から生じる嫉妬や羨望、如何にそのようなものから解き放たれるか、これが仏の説く教えの中心であると言います。確かにそうで、私たちがこの世に生まれてみると、そこにはどこから湧き出すのか、何とも、人々の様々な欲望の渦の中にあることに、何時しか気づかされます。しかもその私自身も、あらゆる方面に、様々な欲望を発散していることに気づかされます。そのようにしているうちにだんだん息苦しくなり、いたたまれなくなつて

きます。そのような状態を「苦」と呼びます。このように「苦」をもたらし「苦」に満ちた世界を、「衆生」と呼びます。この衆生を生きながら、そのような「苦」から解き放たれて、行く行くは極楽往生することが、仏教に帰依する人々の目標であると言います。そのためには如何にすればよいのか、憶良の歌は、その答えを出そうとしてはいません。憶良は、憶良自身の執着を、このように赤裸々に歌い上げて、「衆生の執着を去る」ことの困難さ、「いな」を立てることでは執着を克服することはできないという、行くも帰るもままならないことを、私たちに突きつけているように思われます。極楽往生、確かにそうありたいものだ、だが子への愛着は、何としても去り難いものなのだ、と。

伊藤先生の、この反歌についての解説は、

.....

この反歌に述べるところは逆説だと思う。子への我執を煩惱と知る心が深いだけに、憶良は、逆に、子の何物よりも尊いことを絶叫して全体を結んだのだと思う。ここには、大声を張りあげること、心にひそむ罪意識を追い払おうとするような姿勢があ

る。そして、それだけに、子どもに対する、憶良の深い愛情が伝わってくる。そういう意味では、一首を、子への無類の愛情を述べた歌と見る一般の解釈にまちがいはない。ただ、あくまで知っておくべきは、汎愛と愛執との相剋の重く深い過程を経、愛の苦しみを土台とした上で、一首がなりたっているという一事である。

.....

私は、憶良のこの「銀も 金も玉も 何せむにまされる宝 子に及かめやも」という高名な歌、なぜにこれほどに親しまれているのが、今まで分かりませんでした。いや私知っている憶良の歌はこの一首だけだったことからしてみると、憶良の歌だけではなく、憶良という万葉歌人についても、全く理解の外だったと申してよいと思います。正直申して、実につまらない歌だ、というのが、私が抱いていた感想でした。よくありがちなことですが、このように一連の作品群の中から一つの作品だけ取りだして、如何にもその作者の代表作として流布させること、それは極めて危険なことだということを、今

回肌に触れて感じる事ができた思いでした。

幸いにして私は、巻五に収録されている歌の一つとして、憶良のこの歌を、伊藤先生の解説に助けられながら読む機会を得ることができました。そして初めて単に「何よりも子どもが可愛い」とだけ憶良が言っているのではないことを知ったのでした。驚きまた感動しました。衆生の執着、その中でも最も強い執着である子への「愛」、執着を去ると言っても果たしてそのようなことができようか、というのがこの歌の意味だと言います。恐ろしささえ感じました。

平和惚けしていると言われるこの現代、しかし平和は損なわれつつあるというささやきが徐々に高まっています。また筋道を辿り難い出来事が頻発しているようです。私の携帯には鉄道の遅延情報が、毎日のように届けられます。

「子に及かめやも」は、このような衆生に生きる現代の私たちに、何かを語っているのかもしれないせん。隔てられた千三百年が、一気に霧消したように感じられました。

## 点字から識字までの距離(九六)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十四)

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

### 南相馬の昔話

二〇一五年二月八日(日)と九日(月)の二日間  
にわたって児童図書館研究会の全国大会が福島県福島市飯坂の穴原温泉で開催された。この大会に本宮市のYさん、福島県立図書館のSさんのお二人も参加された。

児童図書館研究会は、一九五三年に東京周辺の児童図書館員によって結成された会で、図書館員や子ども文庫関係者などが参加し、月刊の機関誌『こどもの図書館』(現在第六二巻六号を刊行)などを発行し、子どもの本や子ども図書館に関する研究会や講習会などを開催している。最近では毎年全国規模の大会を全国各地で行っているが今年も福島で開催された。



初日の基調講演「読みあいで、物語を編み直す。何度でも。」は児童文学作家の村中李衣さん、その後分科会が「感じてみよう！読みあいワークシヨツプ」（講師 村中李衣）、「子どもと本をつなぐブックトーク〜基本と実際〜」（講師 東京子ども図書館 張替恵子）、「三・一と子ども」（トモエ文庫 草谷桂子）、「おはなし会を楽しくする工夫」（幼児教育家 藤田浩子）の四つに別れて行われた。懇親会（夕食）の後、午後の八時半から二時間三つの交流会がもたれた。第一の部屋は「たのしいおはなしとあそび 藤田浩子の部屋」、第二の部屋は「じっくり味わうむかしばなし 語りの部屋」、第三の部屋は「とことん話そう本・子ども・未来 何でも話そうの部屋」で、Yさんは語りの部屋、Sさんは何でも話そうの部屋に参加した。語りの部屋では四五人もの参加者があり、八人の方が八つのお話しを語った。その中に調布市から参加されたIさんという方が福島県いわき市小名浜のおばあさんから聞いたという相馬野馬追の話があった。

Yさんは翌日Iさんにお声かけしたところそのお話しのお原稿を送って頂いた。以下Iさんのメール

「その時に語っておられた調布市のIさんの語りが印象的だったので、翌日お声掛けしたら、思わず原稿を送ってくださるとのこととで、以下のおはなしの原稿をいただきました。Iさんは、自分のおばあ様から聞いたお話を記憶を頼りに原稿に書きおこして、福島の方に聞いてほしいとこのお話を披露してくださいました。何とも印象深いお話で、しかも相馬野馬追の始まりというのですから、みなさんにご紹介しないわけにいかないと思います、メールしました。Iさんからも承諾をいただきました。多くの方に祖母のお話を知ってほしいとのことでした。私自身は自分の祖父母から昔話を聞いた経験がないので、Iさんをとてもうらやましく思えました。すてきな出会いがあり、本当に成果と実りのある学習会でした。」

## 一刻(いつとき)餅と相馬の野馬追

むかし、諸国行脚の坊さまが、磐城の国に入ったところで、日が暮れました。さがしがして、やつと一軒の宿をみつめました。

宿のあるじは、「こんな寂れたところへ、坊さまも難儀なことだ。腹もへっていることでしょう。これは、一刻餅といってこの宿の名物です。」と言って、親切に餅を出してくれました。坊さまはありがたく頂戴し、床につきました。

さて、朝になると坊さまは目をさしましたが、自分の身体がおかしなことになっているのに気がつきました。なんと！馬になっていたのです。そこへ宿のあるじがばくろうを連れてやってきて、坊さまは売られてしまいました。坊さまのわずかばかりのお金も荷物も着物も全部とられてしまいました。

市で売られた坊さまは、身体(なり)は馬でも心は人間だもの毎日が辛くて辛くてたまりません。どう

したら人間にもどれるかと思索しながら、泣く泣く暮らしておりました。

ある日のこと、「一刻餅を食べて馬になったものは、もどり草を食べると元の人間に戻れるそうだ。」と言ううわさを聞きました。坊さまは、何とかして元に戻ろう、仇をとってやりましょう、とスキを見て逃げ出し、風の便りをあてにさがしがして、やつともどり草の生えているところへたどり着き、その草を食べて人間に戻りました。裸でふるえていると、親切な人に着物をもらいました。何とか工面してお金をつくり、さて仇を取ってやりましょうと出かけていきました。

坊さまは、素知らぬふりで前と同じ宿に泊まりました。また餅が出されました。が、坊さまは食べたふりをしてこっそり餅をふところに仕舞い、「もう一晩やっかいになりたい。今夜は疲れたので早々に休みたい。」と言って、眠ったふりをして様子をうかがいました。

すると、宿のあるじは家の一番奥の部屋に行き、箆笥の前で立ち止まりました。そして、一番上の引

き出しを開けました。そこでは、田起こし・代掻きが行われていました。しばらくすると、二番目の引き出しを開けました。そこでは田植えが行われていました。またしばらくすると、こんどは三番目の引き出しをあけました。そこでは、稲穂が実り頭(こうべ)を垂れ金色にひかっていました。最後に四番目の引き出しを開けると、稲刈り・脱穀がおこなわれていました。あるじは、できたコメを取り出すと、蒸して、臼と杵で餅をつき始めました。かかった時間はちょうど一刻(いっとき)、今の時間で二時間くらい。

「ははあん、それで一刻餅といったのだな」坊さまは心の中でつぶやきました。

翌朝早くに、まだ誰も起きていないのを確かめると、坊さまは、町に向かいました。そして、菓子屋を捜しました。菓子屋にふところの餅を取り出し、「これで菓子を作ってもらいたい。けれど、残りには決して食べてはいけません。必ず捨てるように」とかたく言いつけました。しばらくして出来上がっ

た菓子を持って宿へ帰った坊さまは、世話になったお礼にと菓子を差し出しました。宿のあるじは、おみさんと子どもを呼び、喜んで菓子を食べました。するとどうでしょう！なんと三人とも馬になりました。牡馬に牝馬に仔馬が一頭ずつ。坊さまはばくろうをよび、三頭を市に連れて行くように頼みました。そして、取られてしまった自分の着物と荷物とおかねを取り戻しました。

ばくろうにひかれて三頭が市につくと、元は人間で馬にされたものたちが、たちまちこれに気づきました。元人間の馬たちは馬の仕事を嫌ったので、またすぐに市にもどされていたのです。元人間の馬たちは怒って手綱を振り切り三頭に襲いかかってきました。三頭の馬は慌てて逃げ出しました。怒った馬たちはずーっとおいかけていきました。追いかけて来て、三頭の馬は逃げて逃げて逃げて相馬までやってきました。

それで、相馬の野馬追いはじまったということです。

「東京漢点字羽化の会」第113～115回

例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



2015年4月の例会（第113回）4月8日（水）  
13…30～15…30、場所 港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

ヒューマンプラザでのわたしたちの活動グループの名称を「東京漢点字羽化の会」と変更した。このいきさつについてSさんが丁寧に報告してくださいました。

朝日「歴史学」の組み合わせを決めた。

5月20日の横浜での印刷へは、IさんとNさんが行ってくださることになった。どうぞよろしくお願ひいたします。

年度初めなので、ボランティア保険の手続きをNさんをお願いした。

6月と7月の活動予定日について打ち合わせた。

『常用字解第二版』の追補文字について岡田さんから具体的な詳しい説明があった。

とてもよいものができ、岡田さんが全部出来たら、木村にもくださると言われ、大変楽しみである。

『萬葉集釋注』の校正について、横浜から、Yさんが6月か7月の例会のときに説明に来られるとの報告があった。

『古語辞典』の入力について、説明を受けた。

基本的な記号類についても丁寧に解説された。

会の名称が変更されたのを機に、様子を見ながら会員を募るためのちらしをNさんに印刷していただき、引き続き各地にちらしを配りたいと思う。

2015年5月の例会（第114回）5月13日（水）

13…30～15…30、場所 港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

会計の方がお休みなので会費は来月に集めることになった。

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを

決めた。

5月20日、Iさんと、Nさんが、横浜へ印刷に行ってくださいました。Iさん、Nさん、ありがとうございます。

会費の変更について話し合ったが、この先のことを考えて現状通りということにした。

8月の活動予定を決めた。

岡田さんが、学習会の様子を報告した。

古語辞典の文字について、記号類について、「歴史学」の記事に出てきた表などについて岡田さんが入力の仕方を詳しく説明した。

2015年6月の例会(第115回) 6月10日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

何時ものように朝日の「歴史学」の入力と校正のグループ分けをした。

7月15日の印刷をIさんとSさんのお二人にお願いした。何時もありがとうございます。

9月の活動日程を決めた。

Iさんが、会計報告をした。

2015年5月分から、打ち出しに行つて下さる

方の交通費の一部を、会費から支出することにした。

7月の例会の時、横浜のYさんが出席され、『萬葉集釋注』第6巻の校正の留意点など説明して下さる。このことも皆様よろしくお願いいたします。

岡田さんが入力方法について、質問を受け、丁寧に説明した。

会員のご家族にご不幸があり、岡田さんが、都合が付きませんでしたので、5月24日に中田様と木村がお通夜にお参りに行かせていただきました。謹んでお悔やみを申し上げます。

#### \* 予告

2015年7月の例会(第116回) 7月8日(水)

14:30~16:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2015年7月の学習会(第91回) 7月18日(土)

18:30~20:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2015年8月の例会(第117回) 8月12日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

8月の学習会は休会

2015年9月の例会(第118回) 9月9日(水)

13…30、15…30 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール  
9月の学習会（第92回）2015年9月19日（土）  
18…30、20…30 ヒューマンプラザ第2会議室

## わたくしごと

高い屋根裏部屋に住む貧しい青年画家に、月が語る三十三話の物語、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの『絵のない絵本』の存在を知ったのは、わたしが中学二年の夏近くであった。

ある日、数学の予定だった授業の時間に、突然わたしたちのクラスではじめての先生が現れた。

その先生は、迷わず「今日はアンデルセンの『絵のない絵本』を読みましよう」と言った。

わたしは『絵のない絵本』という不思議な題名に驚いて、読み始めないうちに、この題名の意味について尋ねた。

「絵のない絵本って、本当に絵がなにも書いてない本、文字だけってことですか？絵本なのに絵がないのですか？」（なんとつまらないことを聞いたの

だろう？）

先生は静かに「そうです。文字だけでお話が書かれていますのです」といった。

「読んで下さい」と、興奮しながらわたしは言った。

この先生の声は、今思い出しても、この本にふさわしいものだった。静かで、淡々と読む声は、まさに白、混じり気のない月の白、さやかな月を想像させた。

けれども、この時読んでいただけしたのは、たった第三夜までだけで、この先生からこんな贅沢なときを与えられる機会は二度となかった。

この後、この先生に出会っても、挨拶以外なにも言えなかった。本当はあの続きを読んでくださいと言いたかったのに！

先を読みたいために、この本を点字図書館から借りることにした。読むではみたものの、わたしに理解できるものと、まるで分からないものがあった。

それでは、読んでいただいた三つの物語のなにがわたしを魅了したのか？正直なところ、第三夜目の

話はよく分からなかった。それに比べて第二夜目の話はいかいらしくてよく分かって、ニコっとほほえんだ覚えがある。けれども第一夜の、月が語っている内容をどこまで当時のわたしを理解できたか分からないけれど、そして、読んでいただいたその内容を具体的に友達に説明することもできなかったのに、胸の奥底の深いところに言い表しがたい清らさと荘厳さとをわたしの心に残した。

ガンジス河の辺（ほとり）の プラタナスの茂みから、カモシカのような、そして、イヴのように美しく、空気の精のように、身の軽やかな、ひとりのインド娘が走り出てきた。

（引用）

「わたし（月）は、そのこまやかな皮膚をとおして、娘の思っていることを見ることができました。とげのあるつる草が娘のサンダルを引きさきました。娘はそれにはかまわず、ぐんぐんさきへいそいでゆきました。その時、のどのかわきをうるおして、河からもどつてきた野獣が、おくびように、そばをとんでいってしまいました。なぜなら、娘の手

のなかに、あかりが燃えていたからです。炎の消えないようにその上にかざした細い指のなかに、あざやかな血が、わたしの目に、はつきり見えました。娘は河に近よって、あかりを流れの上におきました。すると、あかりは流れのまにまに、くだってゆきました。炎はいまにも消えそうに、ゆらゆらしましたが、それでも、消えもしないで、燃えつづけてゆきました。そして、娘の黒いきらきらした目が、

長い絹ふさのようなまつ毛の奥から、魂のこもった目（ま）なざしで、炎のあとを追っていました。もしそのあかりが、目に見えるかぎり燃えつづけているならば、愛する人はまだ生きている、けれども、もしそれまでに消えるようなことがあったら、もうこの世にはいないのだということを、娘は知っていたのです。あかりは燃えながら、ふるえました。娘の心も、燃えて、ふるえました。娘はひざまずいて、祈りました。かたわらの草のなかに、しめつばいへびが横たわっていました。けれども、娘はただ、梵天（ブラーマ 注1）と、婚約のひとの上のことばかりを思いつめていました。「あのひとは生きています！」と娘はよろこびの声をあげました。す

ると、山々からこだまがかえってきました。「あのひとは生きている！」

注1 梵天（ブラーマ）、インドの古代宗教の最高神の名。（大畑末吉 訳、引用終わり）

月のまなざしはやさしい。愛する人は、手に届かぬ切なさも、託し持っている炎を、風から守っている指の中の、たぎる血を炎に添えたいと思っていることも、遠ざかる灯りを見つめながら、願いは増し、生きてさえいるなら、（充分幸せ）と祈りが純化していることも、月はなにかも見続けている。木々も、獣（けもの）も、蛇も、ガンジスの雄大な河水も、山のこだまさえも、森羅万象、全てが、彼女を慈しみ、共に祈り、祝し唱和している。「あの人は生きている」と！

無償の愛という意味で、ノールウェイの詩人であり、劇作家でもある、イプセン作、グリーク作曲の楽劇『ペールギュント』（1867年作）の女主人公ソルベークも、わたしの心に住み続けている女性

である。

物語は、主人公ペールギュントが、結婚したばかりの、しかもどこからか盗んできた花嫁ソルベークを、故郷に残し、自分は夢を求めて各地を放浪し、放蕩の限りを尽くしても、なお（なにか）を探し続けている。

一方、ペールギュントを待ち焦がれて歌う、「ソルベークの唄」はなんともいじらしい。

（引用）

「冬はゆきて春過ぎて / 夏も巡りて年古れど  
／ 君が帰りをただ我は / 誓いしままに待ち

わぶる / ああー、ああー、

なお生きて、君世にませば / やがてまた逢う

ときや来ん / あまつみくににますならば /

かしこに我を待ちたまえ、ああー、ああー」（堀内

敬三 訳、引用終わり）

とうとう、ぼろぼろに老いさらばえたペールギュントは、ふと故郷に残して来た、美しくやさしいソルベークのことを思い出して、故郷に帰る。もしやと、半信半疑で我が家にたどり着くと、年老いて、



目も見えなくなっているソルベীগが、全身全霊、やさしさをもって彼を抱き留め、小さい赤子を寝かせるように、「お休み、愛しいわたしの坊や、揺らしてあげましょう、守ってあげましょう」と、子守歌を歌って、安らかに死出の旅に立たせるのである。

わたしはこのアンデルセンと、イプセンのどちらを先に覚えたのか、はっきり思い出すことができないけれど、内容を考えると、「ソルベীগの唄」を先に知っていたのだと思う。「なお生きて君世にませば、やがてまたあうときや来ん、あまつみくににますならば、かしこにわれを待ちたまえ」と口ずさんでいた。そして、純粹にそのような慕わしい人にもぐりあいたい、と憧れたことを思い出せる。この歌を毎日歌っていたからこそ、アンデルセンの『絵のない絵本』の第一夜を読んでいたとき、言葉の一つ一つをしつかり理解できなかったとしても、全体の雰囲気から、インドの娘のひたむきな祈りを感じ取れたのだと思う。

中学生という時期は、わたしにとってこのような

感性を純粹に抵抗なく受け入れられる時期であった。そして現在でも、そのような性質の人を好んでいる。

けれどもこの二作品だけを見ても、ある意味で、男性にとって理想的な、女性の献身的、崇高な魂のありようを求め、際だたせて書いているのは、何れも男性作家である。

わたしが知らないだけかとも思えるが、女性自身が、自己犠牲を強調した状況を、詩や小説に書いているのを読んだことがない。しかも、無償の愛を捧げている人自身、〈これが無償の愛〉と気づいてしまったなら、もうそれは偽りなのだ。自覚さえしていないような自然体でなければ、それは本物ではなくなってしまう。

そのような純粹性を明確に表現できるのは、やはり異性が描き出す理想の姿こそ、純度の高いものになるのかもしれない。それゆえに、アンデルセンも、イプセンもわたしに感動を与え続けているのだろう。

2015年6月17日（水曜）

# 東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

## 平成27年度 第1回 (第88回) 報告

1 日時 平成27年4月18日 (土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者 (省略)

4 周知事項

・学習会予定 5月23日(土) 夜間 第2会議室

5 学習会内容

使用教材 漢点字 講習用 テキスト

初級編第6回

8 複合文字 (4)

ア 前回までの復習

3. 紹介し落した文字および基本文字にない

象形文字・会意文字二十三字

※ 「昔」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
1・2・3・4の点) とそれをパーツとして含む文  
字一つ。

(46) 「昔」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
(47) 「借」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
(48) 「倉」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
(49) 「操」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
は、前々回の分で、説明を省略します。

(50) 「束」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
木 (キ・1・2・6の点と5  
・6の点) で表す。字式は木ノ口。本来は基本文字  
に含む。木の近似文字。

(51) 「速」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
しんによろ (ヒ・1・2・3  
・6の点) と束 (5・6の点) で表す。字式はしん  
によろ十束。

・束に似た文字 「束」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
1の点と1・  
2・6の点と5・6の点) を含む文字。

(52) 「策」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
竹冠 (チ・1・2・3・5の  
点) と束 (5・6の点) で表す。字式は竹冠ノ束。

(53) 「潮」 (リ下がり・2・3・6の点とネ・  
さんずい (ニ・1・2・3の  
点) と朝 (リ下がり・2・3・6の点。朝の「日」

の部分)で表す。字式はさんずい十朝。音読みのチヨウは漢音。

イ 今回の学習

(54) 「肺<sup>...</sup>」 ラ下り(2・6の点・肉月偏)と市(シ<sup>...</sup>1・2・5・6の点)で表す。字式は月十市。音読みのハイは漢音。テキスト以外の熟語には「片肺」「肺炎」「肺活量」「肺呼吸」「水肺(すいはい・海鼠(なまこ)の呼吸器官。樹枝状をなすので呼吸樹とも)」「など。

(55) 「背<sup>...</sup>」 肉月偏(ラ下り2・6の点)と北(キ<sup>...</sup>1・2・6の点)で表す。字式は北/月(肉月)。音読みのハイは漢音。テキスト以外の熟語には「緇背(いなせ)」「妹背(いもせ・愛し合う男女。妹と兄。姉と弟)」「妹背鳥(いもせどり・ホトトギスやセキレイの異称)」「向背(きょうはい、こうはい。従うこととそむくこと。そむくこと。反抗。表裏。日向と影。)」  
「光背(こうはい・仏像の背後に付ける光明を表す装飾)」「背番

号」「手背(しゅはい・手の甲)」「背負子(しよいこ)」「背泳ぎ」「背戸(せど・裏口)」「背伸び」など。

(56) 「半<sup>...</sup>」 ロ(2・4・5の点)とハ(1・3・6の点)で表す。字式は略。音読みのハンは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「大半」「半数」「一言半句」「半紙」「紙半(しはん・額に付ける三角形の白紙)」「半導體」「播半(すりばん・播半鐘の略。近火の知らせに半鐘を続けざまに鳴らす)」「半返し」「生半可」「半片(はんぺん)」「半天・半纏」「小半時(こはんとき・30分程)」「小半(こなから・半分の半分。二合五勺)」「生半可(中途半端)」「半狂乱」「八里半(焼芋の異称。栗(九里)に近い美味の意。九里よりうまい十三里とも)」「半額」「三行半・三下り半」「三半規管(内耳にある平衡感覚を司る器官)」「四面海に囲まれているため、「半島」が付く地名が多い。など。

漢文のページ

友人会宿 李白

滌<sup>ニ</sup>蕩<sup>セント</sup>千古<sup>ノ</sup>愁<sup>ヲ</sup>

留<sup>ス</sup>連<sup>ス</sup>百<sup>ノ</sup>壺<sup>ノ</sup>飲

良宵<sup>シク</sup>宜<sup>ク</sup>且<sup>ク</sup>談<sup>スヘシ</sup>

皓月<sup>ダ</sup>未<sup>ハズ</sup>能<sup>レ</sup>寢<sup>ル</sup>

醉来<sup>セバ</sup>臥<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>

天地<sup>チ</sup>即<sup>チ</sup>衾<sup>ニ</sup>枕

千古<sup>せんこ</sup>の愁<sup>うれい</sup>を滌蕩<sup>できとう</sup>せんと

留<sup>りゅう</sup>連<sup>れん</sup>す 百<sup>ひやく</sup>壺<sup>こ</sup>の飲<sup>いん</sup>

良<sup>りょう</sup>宵<sup>しょう</sup> 宜<sup>よろ</sup>しく且<sup>しばら</sup>く談<sup>だん</sup>ずべし

皓<sup>こう</sup>月<sup>げつ</sup> 未<sup>いま</sup>だ寢<sup>いぬ</sup>る能<sup>あた</sup>わず

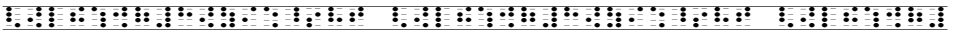
醉<sup>すい</sup>来<sup>らい</sup> 空<sup>くう</sup>山<sup>ざん</sup>に臥<sup>ふ</sup>せば

天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup> 即<sup>すなわ</sup>ち衾<sup>きん</sup>枕<sup>ちん</sup>

生きている限り永遠に付きまとう愁いを  
きれいさっぱり洗い流そうと、この場に  
居つづけ、酒壺を百個空けてしまった。  
だが、まだ美しい月が照らす心地よい夜  
だ。寝てしまおうわけにはいかん。もうし  
ばらく語り合おう。酔っぱらって倒れ臥  
してもいいではないか。天が掛け布団、  
大地がマクラだ。

『朗読してみたい  
中国古典の名文』  
（祥伝社新書）  
渡辺精一

（『朗読してみたい  
中国古典の名文』  
渡辺精一氏の訳文）



友 人 会 宿      李 白

滌 蕩      セント 千 古      ノ 愁 ヲ

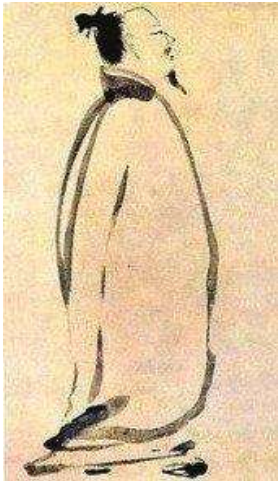
留 連      ス 百 壺      ノ 飲

良 宵 宜      シク 且      ク 談      ズ ベシ

皓 月 未      ダ 能      ハ ズ 寝      ル

醉 来      臥      セ バ 空      山 ニ

天 地 即      チ 衾 枕



李 白  
701～762年

ゆうじんかいしゆく  
友 人 会 宿      友人と共に宿る。  
できとう  
滌 蕩      洗い流すこと。  
留 連      ずっと居つづけること。  
醉 来      酔って。「来」は助字。  
            「くる」の意ではない。  
空 山      人気（ひとけ）のない山。



## 「報告と」案内

### 一 『萬葉集釋注』第四卷の漢点字版

二〇一二年度から横浜氏中央図書館に納入して参りました『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の漢点字版も、三年の年月を経ました。毎年一巻の完成を目指して製作の作業を進めております。二〇一四年度は第三巻を完成させました。万葉集の巻で申せば、巻六まで完成しました。全体から見れば完成率はまだ三割ではありますが、巻六までが「小万葉」と呼ばれて、万葉集の構成の骨子を成す巻であることを思えば、感慨深いものを感じます。本会が横浜で活動を始めたのが一九九六年でした。その折り密かに心に秘めておりましたのが、この「万葉集」の漢点字訳でした。これを究極の目標と位置づけたわけではありませんが、人には言えないものでもありました。と申しますのも、活動を開始しました当初の漢点字使用者である視覚障害者の、漢点字

を、と申すよりも本を読む力が、「万葉集」を読むには遙かに及ばないという、決定的な欠点を抱えていたからに他なりません。

そこから二十年、本会の活動は、会員のご尽力と数多くの皆様のご支持によつて、ここまで続けて参りました。お陰様で読者もその力を養うことができようです。

今年度は第四巻（巻七・巻八）を納入すべく、製作に拍車をかけております。ご期待下さい。

### 二 『古事記』

来年度・二〇一六年度は、『萬葉集釋注』の納入は一時お休みして、『古事記』（次田真幸、講談社学術文庫、上・中・下三巻）を製作する予定です。

『古事記』は、ご承知のように元明天皇の命によつて、太安麻呂が稗田阿礼の収集した資料をまとめた、わが国最古の歴史書です。次田先生の現代語訳と解説がついています。

『古事記』は全体が三部に分かれています。

上巻は「神代」です。天地開闢から葦草葦不合命（うがやふきあえずのみこと）まで、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事が収められています。神話・伝説と多数の歌謡とを含みながら、天皇を中心とする日本の統一の由来が物語られています。

「万葉集」と並んで最も基本的な資料です。

### 三 定期刊行物

朝日歌壇・俳壇… 朝日新聞に、それぞれ四人の選者が選出した短歌と俳句が、毎週掲載されている記事を、一ヶ月分まとめて漢点字訳しております。

健康記事… 朝日新聞と読売新聞に掲載される健康記事を選択して漢点字訳して、月刊でお届けしております。

購読者を募集しております。ご希望の方は、お申し出下さい。

以下は、購読料無料です。

「横浜通信」… 横浜で製作しています。漢点字の読みの練習を目的に作り始めました。とは言え、読み応えのある記事ばかりです。

文字・言葉にかかわる、短めの記事を選択して、漢点字訳しております。「読めるようで読めない…」など。

“be on Saturday”… 東京で製作しています。朝

日新聞の土曜版のコラム、“be on Saturday”に掲載されている四つの「歴史学」を、一ヶ月分まとめてお届けしております。

「商魂」「食事」「交流」「夢想」と題されて、興味深い考察が展開されます。

是非ご一読下さい。



しろかピンクか桜色

## 編集後記

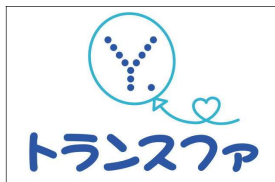
▼今号は、ちよつと原稿の総量が少なかつたので、文字をやや大きめにして、行間隔も広めにしました。かえってこのほうが読みやすいのではなからうかと思ひます▼定例会の席上で、ウインドウズ10のことが話題になりました。マイクロソフトがより便利になると、「10」を宣伝していて、間もなく売り出されるようです。しかし、われわれのように、特殊な分野でパソコンを利用してゐる者たちにとっては、そういう一般的な便利さというものは全く関係なく、今まで使えていたソフトが使えなくなるようなことがあると、大変なことになり、極端な場合には全く活動が出来なくなつてしまう恐れさえあります。マイクロソフトのシステム開発の方針が、われわれにとつて悪い方向に進まないよう、ただ祈るのみです▼ウインドウズはファイル名の大文字と小文字を区別していない、これはMS-DOS時代の名残だということを最近知りました。これは便利なことかも知れませんが、かえつて不便だということもあります。困つたことですね。(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。